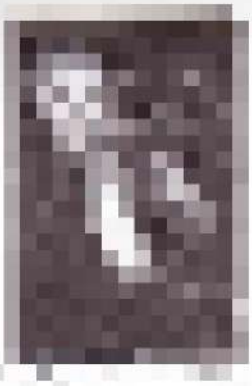
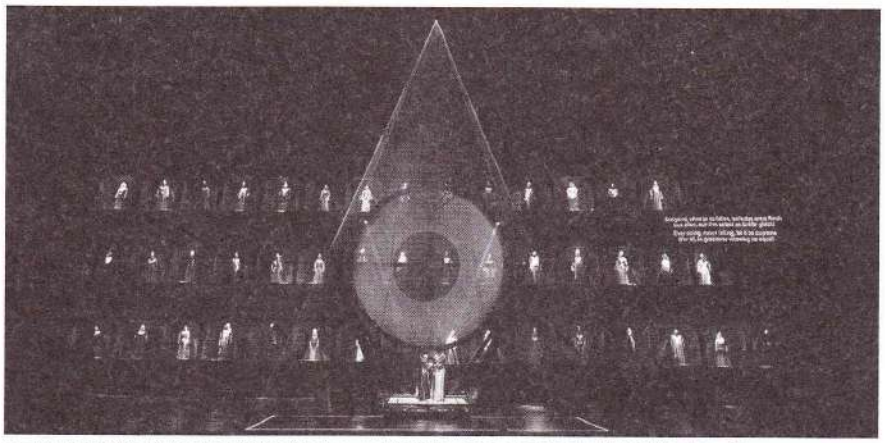


CONCERT
1月～2月
コンサート、イヴェントから
EVENT

Concert ザルツブルクのモーツァルト週間、オープン

今年から新インテンダントのローランド・ビリャソンが5年間かけてモーツァルト・ワールドへの航海に誘う。

1月24日の開幕コンサートには、若かりしビリャソンが初めて聴いたティトやイドメネオを歌っていたという同郷のラモン・バルガスを招き、その二つのオペラからの抜粋プログラムだった。リッカルド・ミナージの指揮するモーツァルテウム管弦楽団が「交響曲第29番」を楽しそうに奏でた後、《皇帝ティートの慈悲》の序曲へ移り、ウィーン国立歌劇場合唱団とバルガスが音楽のみで雄弁な舞台を創り上げた。後半の《イドメネオ》はバルガスが譜面台を必要としたのが残念だ



モーツァルト週間においてフェルゼンライトシューレ上演された《エジプト王タモス》から ©Matthias Baus

ったが、最高音のみ、多少伸びなかったものの、完璧な歌唱を聴かせた。アンコールには《コジ・ファン・トゥッテ》のフェッランドのアリアも歌い、満足感を与えた。

同日の夜は、劇音楽《エジプト王タモス》をベースに、新しく編み上げた今年の目玉演目がフェルゼンライトシューレで披露された。スペインの演劇集団ラ・フラ・デル・バウス所属カルルス・パドリッサの演出は岩壁を生かし、それをよじ登ったり、上から吊り下げられて登場する等、エキサイティングだ。知名度急上昇中のメキシコ人女流指揮者アロンドラ・デ・ラ・パーラもモダンな演出の一翼を担った。メーネ王のルネ・パーペはもちろん、題名役のナタポーン・タマティやヒロインのファトマ・サイドなど奇抜な視覚に負けない歌唱を聴かせた。来年以降が楽しみな幕開けだった。(中 東生)